

## 幕末詩人館柳湾詩における自然描写

—和習的な要素を中心に—

朱 秋 而\*

### はじめに

江戸時代末期の漢詩人館柳湾（一七六二～一八四四）は、新潟大川に生まれ、十三歳に江戸に出て、亀田鵬斎について学んだ。詩風は中晩唐を主とし、清純温雅にして庶民的情緒に優れている<sup>1</sup>。

小論では、『柳湾漁唱』一集・二集・三集を繙き、「虫売り」や「案山子」など具体的な詩語を通して中国文学の四季の自然描写に見られない幕末詩人柳湾の独得な表現と詩情を明らかにし、晩唐詩に影響される以外の柳湾の詩風のもう一つの側面を探ってみたいと思う。

### 一、「虫売り」「案山子」「秧鷄」「茄子」

まず、柳湾の漁唱一集に収録される七言絶句「夏日、睡より起く」を掲げておこう。

独臥風床睡味長 独り風床に臥して 睡味  
長し

醒来残日下西墻 醒め来れば 残日 西墻  
に下る

門前時壳虫過 門前 時に 虫を売りに  
過ぐる有り

一担秋声報晚涼 一担の秋声 晚涼を報ず

（一人で涼風の吹き入る寝床に横になり、長くこの寝ごこちを楽しむ。目をさましてみると、もう夕日が西の垣根におりている。門の前を時々虫

売りが通りかかり、ひとにないの籠の秋の虫の声  
を聞くと夕方の涼しさを覚える。）<sup>2</sup>

夏の午後の昼寝から起きて、もう夕方時分になっている。絶句作法でよく知られる起承転結の転に当る三句目は「門前時に虫を売りに過ぐる有り」と詠じ、結句の四句目は「一担の秋の声が夜の涼しさを知らせてくれている」と一首をしめくくっている。

中国文学では、虫の声で秋の季節感や哀愁を表現する作品は詩経以来多く見られる伝統表現の一つである。しかし、調べた限り「虫を売る」や「虫売り」は中国詩文には見られない表現のようである。この詩の柳湾の詩情は実は江戸の生活に基づいていて考案されただろうと思う。

なぜかというと、日本人には中国や西洋には入られない虫の音を聞く耳を持っていて、それをこよなく愛好する伝統を平安時代以来、生活と文学を通して培われてきている。江戸時代になると、『俳句大歳時記』の「虫売り」「虫籠」の項目に次のように述べられている。

『改正月令博物筌』（文化五）『季寄新題集』（嘉永元）『ぬくめ種』（嘉永二）に七月として所出。『守貞漫稿』（嘉永六）に、虫売「蛩を第一とし、蟋蟀・松虫・鈴虫・響虫・玉虫・蝸等、声を賞するものを売る。虫籠の製、京坂粗なり、江戸精製、扇形・舟形など。種々の籠を用ふ。」

また、江戸の町人の文芸である俳諧にも時々登場する秋を代表する風物の一つがある。

虫売や河内がよひの小提灯 蕪村

\*国立台湾大学教授

虫売のかごとがましき朝寝哉 蕪村

その中でも俳人桃隣の「宵過や虫売り通る町はづれ」が歌う町外れで虫売りの振り売りの声の詩情に似通う所がある。夏から秋にかけての季節の移り変わりを和歌や俳諧などの和文芸に由来する日本的で繊細な詩情と心境を「虫売り」「一担の秋声」を通して描いている。

次は「案山子」が詠まれている「漫吟」という七言絶句を見てみよう。

新詩誰共細評量 擁鼻一唸千恨長  
只有寒園案山子 點頭風外立斜陽

「かかし」を「案山子」と表記するのは日本独自の使い方である。中国には見られない。『俳句大歳時記』「人事 農耕」P213-4には、

『大日本国語大辞典』「竹または藁など」、『古事記』神代巻に「少毘古那神を頭はし白せし謂はゆる久延毘古は、今者に山田の曾富騰といふぞ。この神は、足は行かねども、尽に天の下の事を知れる神なり」とあるのがそれである。

平安時代には、曾富騰からソホツに変化した。ソホツは、案山子に限らず、広い意味で鳥おどしということで谷川に仕掛けて音を立てて鳥獣を追う装置の名にも転用されたが、他面では依然として案山子の古名として用いられた。

と、鳥や獣を追い払う装置の名前であると説明している。また、案山子の字の由来について、鈴木棠三氏は北慎言の『梅園日記』の内容を次のように紹介している。

カガシに案山子の字面をあてる根拠については、北慎言の『梅園日記』に考証がある。その説によれば、禪家で、他の僧を罵倒して案山子という。そのいわれは、多くの山の中で北の方角にいちばん高くみごとな山を主山といい、その南にあたって離れ山があり机のような形をしているのを案山といい、……見かけばかりで働きもせぬ役たたずといったのだ

というのである。

連歌の『無言抄』（慶長三年）に秋として初出、そして『初学抄』（寛永一八）『毛吹草』（正保二）以下八月、それに『増山の井』かがしは、鳥おどしの人形なりとするしている。『滑稽雑談』に

『貞和集』に「推倒目前案山子 牛頭南去馬頭東」

という一聯を紹介している。編者は、

和俗、田を守るため、秋に至りて鹿を驚すため、藁人形のごとくなるものを造り、弓箭を帯させ、田間ごとに立つる。これを鹿驚（加加之）といふ。

また、案山子の字を用ゆ。諸書に徧く求むれども、禽獣を驚かす具、中華の説をいまだに聞かず、また伝灯録にも案山子の名あるものなし。ただ『貞和集』に案山子代語あり。しかれども、そのものたるや、不審。

と述べ、中国には調べても出てこない用法であり、前掲の『貞和集』に出て来る案山子も不審に思われるという。

総じて中国には無かった呼び方で詩文作品には使用例はもちろん皆無である。江戸時代の多くの詩人の中にも山梨稻川（一七七―一八二六）の『稲川詩草』巻四にある「案山子」一首しか見当たらない。掲げてみよう。

笠破簑殘貌漸虚 秋風獨立護新畬  
誰知當日久延彦 多識能談天地初

（久延彦神名見古事記足不行而悉識天地四方古今事即案山千之靈也云）

自註に見られるように『古事記』の久延彦伝承に基づいてかかしの風貌と博学を描いている。しかし、日本の連歌と俳諧に目を転じれば、多くの作品が詠まれている。

物の音ひとりたふるる案山子かな 凡兆  
近づきになりて別る案山子かな 惟然

次に「秧鶏」つまり水鶏のことに目を転じて見よう。

短宵格格苦催明 短宵 格格 苦だ明を催す

憐汝田間応候鳴 憐む 汝の 田間に候に  
 応じて鳴くを  
 但恐農翁残夢裏 但だ恐る 農翁 残夢の裏  
 聴為租吏打門声 聴きて 租吏の 門の打く  
 声と為すを

「短宵」はおそらく「みじかよ」の漢訳だろう。連歌や俳諧では夏の夜を短夜と詠んでいた。多くの作品が詠まれた。

中国の場合はどうだろう。調べたところ、宋・王之道「和文倅侯彦嘉二首 其二」にある「誰謂春宵常苦短、老來無寐厭長更」のように春の名残惜しい夜を指す場合が殆どである。夏の短夜を詠んだ作品は見当たらない。第一句は水鶏がかくかくと鳴く、第四句は水鶏の鳴き声を、地方官が税金を取り立てる農民の門をたたいている音になぞらえている。日本の季節感と中国の農民を愛護する社会詩をうまく融合させている一首といえよう。

和歌と連歌以来の水鶏を詠む伝統を受けて芭蕉をはじめ、多くの俳人に詠まれる代表的な句を示しておこう。

水鶏啼くと人のいへばや佐屋泊り  
 此の宿は水鶏もしらぬ扉（とぼそ）かな  
 僧もたたく月の門田の水鶏哉

柳湾が「短宵」「格格」「田間…鳴」「打門声」を用いて「秧鶏」を詠んだ手法と捉え方は、和歌・俳諧の和文学伝統の認識を下敷きに行っていることは明白であろう。

続いては日常的な野菜を季節感を表わすものとしてと思われる例を確認してみたいと思う。「庚寅の夏初、墓を新瀉に省し、滞留すること数月、九月十八日に、目白の園居に帰る。翌日家宴あり、児孫輩咸く集まり、小酔して醺然たり。口占五絶句」という長い前書きが付いている絶句五首の中の一詩である。

忽覚年光客裏過 忽ち覚ゆ 年光 客裏に  
 過ぐるを  
 園中秋物已無多 園中の秋物 已に多無し  
 山僮料得帰来晩 山僮 帰来の晩きを

料り得て

霜後摘残九日茄 霜後に摘み残す 九日の茄  
 茄子という野菜に秋の季節感をかもし出せている  
 詩歌感覚は、どこに由来するのかを考えてみたい  
 と思う。中国の詩文に全く取り上げられないわけ  
 ではないが、詩語としてのイメージは長い歳月を  
 経ても定着していないようである。一方、日本人  
 は古くから茄子を好み、どのように解釈すればいい  
 のかはさておき、「秋茄子嫁に食わすな」のこ  
 とわざがあるほどである。

「九日茄」は重陽の日の茄子の意味であろう。中国詩人の作品から類例を見出すことは難しいだろうと思うが、しかし近世の俳諧を調べてみると、次に掲げる句のように「茄子狩」や「もぎ残す茄子」「茄子をちぎる」などの表現が見られる。柳湾が詠んだ「摘み残す九日茄子」の詩情は俳諧的趣きを帯びていることといえよう。

深川の末や女中の茄子狩 桃隣  
 もぎのこす茄子はいづら菊の園 嵐蘭  
 茄子あへや若紫のすり粉鉢 高橋因元  
 見せばやな茄子をちぎる軒の畑 惟然

茄子を詠ずる柳湾の作品をもう一首。「某禪師の山房にて戯れに駒籠茄子を咏ず」

紫玉膨脗大於椀 僧廚摘取炙秋香  
 如今欲問寒山串 別為削来幾寸長  
 駒込に一家持けり初茄子 木白  
 ちさはまだ青葉ながらになすび汁 ばせを  
 夏菊や茄子の花は先へさく

「駒込茄子」を詠む「駒込に一家持けり初茄子」という句とは同巧の妙が見られる。柳湾詩の二句目以降は、茄子の調理に焦点を当てていて、焼き茄子にして秋の香ばしい香が漂う。江戸の日常生活から滲み出した秋の情景と感情を茄子を通してユーモラスに巧みに捉えていると評していいだろう。

## 二、「秋の草花」

本章は柳湾が秋の草花を詠んだ「小園秋草花盛開」三首を読み解いてみたいと思う。

秋園花草壓欄披 吟榻頻追幽興移  
露態風姿細評品 綴成幾首藥名詩  
滿欄花發錦叢叢 幾日清吟伴草蟲  
領得山園秋富貴 休言老子是詩窮  
自詠身臻閬苑中 羣花含露玉玲瓏  
草亭叵署尋常号 綠篆新顔小蕊宮

秋になって花園に植えた草花はさまざまな花を開いて楽しませていると柳湾はうたっている。云うまでもないが、中国の詩人も秋の園を詠じている。いくつか例をあげて確認してみよう。唐・吳融の「秋園」詩は、

始憐春草細霏霏、不覺秋來綠漸稀、  
惆悵擷芳人散盡、滿園煙露蝶高飛

また、宋の張耒「秋園雜感 二首」其の一「秋晚園林疏靜、天高風日明鮮、中有搢筇病客、三杯卯酒醺然」であり、秋の寂しさと心の愁いなど内心の感懐を述べている。宋の姜特立「秋園」詩は、「商氣入山園、園花取次妍、蓼叢迎露重、菊本望秋圓」と、秋になって咲き始める花を詠んでいるが、描かれているのは蓼と菊の花である。

一方、日本は『万葉集』巻八「秋相聞」に見られる

神さぶといなぶにはあらぬ秋草の結びし紐を  
解くは悲しも

や巻十「寄草」

道の辺の尾花が下の思ひ草今さらになどもの  
か思はむ

は、秋の草花に歌人の深い気持を込めて詠みこまれている。平安時代に入ると、『古今六帖』「草」の部の「秋草」に元方の次の歌が収録されている。

石上ふるの草も秋はなほ色ことにこそ改まり  
けれ

中世になると、『連珠合璧集』（文明八）に「千草」として秋に所出。江戸時代の俳諧書『四季名寄』

（天保七）や『栞草』（嘉永四）に「色草」として兼三秋とする。さらに松田修氏は次のように述べている。

秋草は概して姿やさしい優美なものが多い。千草という場合は、少し感情が違って秋の野に咲くもろもろの草という意が含まれている。日本人にとって秋の草にする美の感情や感覚は万葉の時代から延々と引き継がれてきていると思われる。『滑稽雑談』の「花野」を示しておこう。

△今按に、花野と云詞、連歌新式にも不載、御傘にも草花の条に野花の説侍る、然ども連歌に専ら用る詞也。連歌随用集云、秋部「草枯に花残る」とし、下に細字註して「花野としても草花の事也、秋也」と有、毛吹草曰、「連歌の詞、中秋の部、花野とあり」。

秋になって草が枯れて花が残ると言っている。さらに「草花」については、次のように説明している。

御傘云、又云、草花と云句に、萩・薄・女郎花・蘭・槿・小車・吉更・竜胆・真葛等不可付、同意也。

代表的な秋の草花の種類として、萩、薄、女郎花、蘭（藤袴）小車などが挙げられている。家の庭と野外の花々の違いもないではないが、しかし秋の園に何種類もの花は錦のように咲き乱れる優雅なイメージと愛でようとする美意識は歌連歌俳諧などの和文芸に由来すると思う。

この連作の後に詠まれた「又、一絶、邦俗を用ひて呼ぶ所の花名」を見れば、柳湾がイメージする秋花の形象を具体的に知ることができよう。

尾花芒花招処晚風斜  
露草淡竹葉叢邊停小車旋覆花  
盡日秋園話何事  
仙翁花剪秋羅對女郎花敗醬草

日本の呼び名で秋の花々を詠む一首である。花の日本名の後ろに柳湾自らその花の漢名を記している。尾花は芒花、露草は淡竹葉、小車は旋覆花、仙翁花は剪秋羅といい、最後に女郎花は敗醬草と

のことである。『林園月令』を編集した柳湾は季節と節氣を代表する植物の和漢の名称に精通している。この七絶を詠むと、すぐ山上憶良の「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花」「萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔が花」を思い浮かべるだろう。重なった花は尾花と女郎花の二つだけであるが、和歌に詠われる名前のまま、漢詩に盛り込んだことに特別な意味があると思う。歌や連歌俳諧の秋の草の優雅さを詩で表現しようとしている試みは大いに評価できると思う。

続いては、憶良の歌になかった「露草」「小車」「仙翁花」は、日中文学にはどういう風に詠われているのかを『滑稽雑談』下の記事にもとづいて、確かめてみよう。

先ず「九五 鴨跖草」という項目を掲げておこう。

順和名云、鴨跖草、楊氏漢語抄云、鴨頭草、和名都岐久佐。

大和本草曰、鴨跖草、葉は竹葉に似たり、花の形は鳳仙花に似て碧色也、和名月草とも露草とも云。

露草の葉は竹の葉に似ているから「淡竹葉」と称されよう。平安時代から和歌に詠みこまれている。例えば、『夫木和歌集』 俊頼

いかばかりあだにちるらん秋風のはけしき野への露草の花

江戸時代には露草を詠む句は次のように少ない。

露草やおもきが上の小夜時雨

陸に咲きて我こそまどへ鴨頭草ら

二句目の後半の「小車」は「小車花」で、『滑稽雑談』に

韻会云、蘇旋覆、一名金仏草。

大和本草云、金仏草と云、単葉・千葉兩種有今按るに、野生の者は小車と云、園圃に蒔て生ずるを、俗に金錢花となん云也。

「小車」はつまり中国の「旋覆花」を指しているようで、俗称は金錢花である。

それから四句目の「仙翁花」については、『滑稽雑談』下巻之十四「仙翁花」

時珍本草云、又有剪紅沙花、莖高三尺、葉旋覆……、一名剪紅羅。

五鳳集云、五邦有一種奇花、毎年以六七月著紅、謂之仙翁、世伝、自嵯峨仙翁寺所出也。大唐詩文之中、論花甚夥、未聞有此名、異哉。詩、一簇仙翁寺裏霞炎天最愛吐奇葩、大唐四百余州闊、未識秋風有此花。

下学集云、嵯峨仙翁寺始出此花、故云仙翁花。大和本草云、剪秋羅、花史に出たり、今世人賞玩して品類多し、花紅也。

又白色有、褐色有。嵯峨仙翁寺より出たるゆへ名づくると、此寺今は絶てなし。

この花については、『五鳳集』にすでに不審に思われている。「大唐四百余州闊、未識秋風有此花」と詠じ、広いとは言え、中国には秋に咲くこの花を探しても見つからないらしい。嵯峨の嵯峨仙翁寺に由来する花なので、おそらく中国から種を持ち帰られて広げただろう。『花史』には「剪秋羅」という。和歌にも俳諧にも詠まれる秋の花である。

秋の野の紅梅草の花みれば春のこころをまかせつる哉

秋の日を気長に咲くや仙翁花

「新秋雑句」詩は「雨霽晚風吹露清、小庭閑繞竹籬行、秋聲秋色恰相得、十様錦邊促織鳴」と詠じ、秋の情趣を繊細に豊に捉えていることはとても印象的である。さらに「曉起」詩も「長松月曙小庭幽、籬畔蟲聲報早秋、涼露重重墜如雨、曉風吹坼碧牽牛」とうたい、詩の後半は早朝に風が吹いて露がばらばらと落ちる中に、青の朝顔は花開く。

### 三、地方色豊かな風土と自然描写

柳湾の詩はいかに和歌や俳諧の季節感覚、題材、美意識それに表現を取り入れていたのかを述べて

きたが、その詩風を考えると、見逃してはいけないのは、地方風土を鮮やかに歌い上げていることである。最も代表的な作品を挙げてみよう。岐阜の下呂温泉を詠じた「中山七里」に

楓林霜後競鮮明 楓林 霜後に 鮮明を競い  
曝錦中山七里程 錦を曝す 中山 七里の程  
誰道天機無織具 誰か道う 天機 織具無しと  
長溪処処棧編篋 長溪 処処 棧 篋を編む  
と詠う。紅葉の美しさと険しい溪谷にもかかわらず巧みに棧道が造られている不思議さをリアルに捉えているところに詩人の手腕をうかがわせる。

江戸の「山谷」（新吉原遊郭）通いの遊客を乗せる舟「猪牙舟」を詠んだ「戯れに猪牙舟を詠ず十韻」も他の詩人には類例を見ない、柳湾独特の観察眼が光っている。

艇子制雖小 艇子 制は小なりと雖も  
猪牙名乃奇 猪牙 名は乃ち奇なり  
(中略)  
溪鼠形何肖 溪鼠 形 何ぞ肖たる  
瓜皮称可卑 瓜皮 称 卑むべし  
又晒楼艦巨 又た晒う 楼艦の巨にして  
進退両遅遲 進退 両ら遅遅たるを

この舟は江戸で考案されたもの、十韻つまり二十句で詠っている。中国の「瓜皮船」に似ているようであるが、軽蔑しすぎる呼び方に異議を唱えて、巨大なやぐら船と違って軽快に水面を走ることができるという。

次に柳湾が竹枝体で地方風俗を詠じた連作を検討してみたいと思う。「羽州」今の山形県上市市金山にあった鉱山へ赴いたときに詠んだ「金山雜詠」十三首のうちから一首を示しておこう。

山丁陟險自跳梁 山丁 險を陟りて 自ら  
跳梁し  
負礦帰来意気揚 礦を負い 帰り来りて  
意気揚る  
小塊鎚摧淘汰去 小塊 鎚摧して 淘汰し  
去れば  
椀中留得紫金光 椀中に留め得たり 紫金

## の光

中国の漢詩文にあまり取り上げられない鉱山という新しい題材に着目し、十三首もの作品を歌い上げ、いろんな視点から鉱山の地形やそこで働く男女の気質と生活を緻密に観察し、リアルに詩に盛りこまれている。

最後に、永井荷風が愛称する（『葦斎漫筆』）日蓮宗の法明寺、俗称鬼子母神の東京の雑司が谷を題材にする「雑司谷雜題」という連作がある。紙幅の関係でその中から一首を次に掲げておこう。

鬼母堂前満路塵 鬼母堂前 満路の塵  
幾群香火晚帰人 幾群の香火 晩帰の人  
風車斜挿籃輿上 風車 斜めに挿む 籃輿  
の上に  
紅緑渾渾転彩輪 紅緑 渾渾として 彩輪  
転ず

とある。疱瘡の守り神子育ての神として江戸時代に厚い信仰を集めている雑司が谷の民衆の参詣の様子と一帯の風景をよく書き留めているといえよう。

## 終わりに

柳湾の詩集を通して詠んでみると、全体的に非常に四季を重視し、春夏秋冬の移り変わりを繊細な筆致で描いていることがわかる。中国詩の伝統を大事にしながらも、日本独特な自然観や観察を捕らえているようにも思う。実際、柳湾詩に使われる詩語「虫売り」「案山子」「秧鶏」「茄子」「秋の草花」を詳しく検討してみると、実は和文芸の伝統に深いかわりのある詩歌表現であり、とくに同時代の俳諧の素材・季節感・美意識・表現手法に通じる点が多く見られる。さらに「又、一絶、邦俗を用ひて呼ぶ所の花名」のように柳湾自身が積極的に和の要素を取り入れようとする姿勢さえ感じられる。それから柳湾詩の自然描写のもう一つ大事な特色は「金山雜詠」や「雑司谷雜題」などその土地に根付いた人文風俗と自然景色を繊細

に捉え、描き出されていることである。

**注**

- 1 渡辺秀英「館柳湾」『日本古典文学大辞典』第四卷、岩波書店、1984年。
- 2 現代語訳は徳田武氏の「日本詩人選集」第七巻によるものである。以下の引用も同じ。

**参考文献**

1. 富士川英雄（他）編『詩集日本漢詩』第十二巻 1987年 汲古書院。
2. 徳田武校注『野村篁園 館柳湾』「江戸詩人選集」第七巻 1990年 岩波書店。
3. 渡辺秀英注『館柳湾漁唱註』1977年。